

ミュージアム・コンサート

東博でバッハ vol.52 木越 洋(チェロ)

無伴奏チェロ組曲 全曲演奏会

曲目解説

J.S.バッハ:無伴奏チェロ組曲

J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》(全 6 曲)が書かれた年代は、ケーテン宮廷楽長時代(1717-23)の前期と推定されている。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード(前奏曲)」を、ジグの前の第5曲に「メヌエット／ガヴョット／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

「第1番」

ト長調というチェロの運指に合った調性が、伸びやかな響きを生み出す。第1曲プレリュードは本組曲中最も有名な楽章で、間断なく続く16分音符の流れがその背後で進む和声を浮き彫りにする。第2曲は安らぎに満ちたアルマンド、第3曲はイタリア型の急速な3拍子によるクーラント、第4曲は優雅なサラバンド、第5曲には2つのメヌエットが用いられている。そして第6曲の軽快な短いジグで曲を閉じる。

「第2番」

ニ短調という調性は、音楽を内省的な方向へ導く。第1曲プレリュードは、和声よりも旋律そのものに重点が置かれている。第2曲は高度な技巧が要求されるアルマンド、第3曲のシンプルなイタリア型クーラントを経て、第4曲は引き伸ばされた旋律に和音が重なり、憂愁を湛えたような横顔を見せるサラバンド。第5曲の2つのメヌエットでは、主調の第1メヌエットがニ短調、第2メヌエットがニ長調となり、古風な響きを醸す。第6曲のフランス風ジグは、規則正しい8小節の楽節構成による。

「第3番」

第1曲プレリュードは、16分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第2曲は、軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第3曲は、音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クーラント。第4曲は、典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美し

い。第 5 曲ブーレは、演奏会用の小品として奏される機会も多い有名曲。第 6 曲は、終曲にふさわしい堂々としたジーク。

「第 4 番」

本組曲のなかでは比較的地味な曲だが、削ぎ落とされたようなシンプルさを備えている。第 1 曲は、分散和音の織りなす色合いが美しいプレリュード。第 2 曲は素朴なアルマンドで、第 3 曲のイタリア型クーラントは、リズムに新しい可能性を模索している。第 4 曲のサラバンドでは、清らかな旋律が和音をともなって歌われる。第 5 曲は同じ調性による対照的な 2 つのブーレ。第 6 曲はほとんど重音を用いず、速いテンポで流れていくジーク。

「第 5 番」

全曲にわたりフランス風の性格を持っている。第 1 曲はフランス序曲形式のプレリュードで、荘厳な雰囲気が始まる序奏部に速いテンポの主部が続く。第 2 曲もフランス風のゆったりとしたアルマンド。第 3 曲は、軽快に駆け抜けるイタリア型とは異なり、繊細なリズムを持つフランス型クーラント。第 4 曲は、8 分音符の分散和音が深い瞑想へと誘うサラバンド、第 5 曲は躍動感ある第 1 ガヴオットに対し、第 2 ガヴオットの流れるような 3 連符が印象的。第 6 曲は、強拍部に付点リズムが置かれた特徴的なジークで締めくくる。

「第 6 番」

本来 5 弦チェロ(高音側に E 線が追加された)のために書かれており、通常のチェロでは演奏困難とされるが、技巧的にも内容的にもスケールが大きく、充実した作品である。第 1 曲は、2 本の弦にまたがって同音高を弾くなど、弦楽器ならではの技巧が凝らされた難度の高いプレリュード。第 2 曲は、美しい陽光が射し込むような抒情的なアルマンド。第 3 曲は、軽やかさが心地よいイタリア型クーラント。第 4 曲のサラバンドでは、重音の合間を縫うように紡ぎ出される旋律が美しい。第 5 曲は、素朴な舞曲的雰囲気を持つガヴオット。第 6 曲ジークは、様々な音型が見事に組み合わせられており、これをもって「無伴奏組曲」のフィナーレを飾る。